
研究ノート

「社会的絆の理論」の再考
— 発達段階における社会的絆の機能変容に関する試論 —

那 須 昭 洋* 菅 野 純**

Re-considering "Social Bond Theory"
— A tentative assumption for functional changes of the social bonds
based on the developmental stage —

Akihiro Nasu* and Jun Kanno**

(*Graduate School of Human Sciences, Waseda University and

**Faculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : January 24, 2007 ; Accepted : March 2, 2007)

Abstract

In this paper, the author reviews past researches based on "Social Bond Theory" propounded by Hirschi and points out contradictions of version of them. In addition, it is said that there is an important perspective that delinquent behavior cause in the relations between the personal and the environment. As it were, person and situation interactively determine behavior.

The author further proposes a new perspective of "Social Bond Theory" to reformulate the process of internal causes of delinquent behavior involved with external causes. Hirschi suggests that individuals who have each strong bond to society in terms of attachment, commitment, involvement and belief are more likely to conform. However, the author argued in this perspective these four elements can cause or reduce delinquent behavior of individuals during development. In other words, they are primary abilities to acquire in the relations between the person and his/her environment. Change and development in the relationship between them is the process of four social bonds. And also they are formed by obtaining knowledge through learning personal social conformity. To illustrate this new perspective, the author reinterprets some past decade researches.

Finally, it is to add the discussion of future study premised on this series of implication.

Key Words : Social Bond Theory, delinquent behavior, changing relation

*早稲田大学大学院人間科学研究科 (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

**早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

【問題と目的】

非行に関する多くの理論のうち、Hirschi (1969) の「社会的絆の理論」は、社会学の犯罪研究から誕生した。彼は、個人を社会に繋ぎとめておく4つの社会的絆が弱くなったときに非行が発生すると指摘した。また、「社会的絆の理論」は、社会的絆を個人と社会の紐帯であるとしながらも、社会での日常生活のありかたにより、社会的絆が培われるといった個人の内的な抑制要因として機能することに焦点をあてた点に特徴がある。

Hirschi (1969) は、社会的絆として「愛着 (Attachment)」「コミットメント (Commitment) ⁽¹⁾」「巻き込み (Involvement)」「規範観念 (Belief)」の4種類をあげている。「愛着」とは、家族や学校、仲間など、愛着を感じる相手の期待に沿い、裏切らないとする感情レベルでの絆である。誰も非行行動は望まないのに、愛着を感じる相手を見つけることができれば、個人と相手とを結ぶ絆すなわち内的抑制要因が働くとされる。「コミットメント」とは、行動を選択するに際して損得を計算して行動することや、社会で承認されている目標の達成に関わっている程度を意識するといった意識レベルの絆である。遵法的な世界で成功しようと考えている人にとって、非行行動はその世界での成功の機会を逃してしまうことを意味するので、内的抑制要因が働くとされる。「巻き込み」とは、慣習的な活動に自分をまきこませる包絡の度合により、社会との紐帯をもち、日常的な事柄に忙殺されている限り、非行行動に陥らないとされている。つまり、慣習的活動に従事する時間が多ほど非行行動をする時間がなくなるとしている。「規範観念」とは、法を正当なものとして、それを中和しない内的規範ともいべき信念を持つ人ほど非行行動には走らないというものである。これら4つの社会的絆においては、主要な他者との関係を重視する関係上、「愛着」が重要な要素といえる。

「社会的絆の理論」を基礎におく非行の研究において、林 (1989) は日本と中国、2カ国による一般少年 (中高生) と非行少年の社会的絆の強弱と非行との関連についての検証を試みている。両国のいずれも、一般少年は非行少年より、社会的絆が強いという結果から「社会的絆の理論」を支持している。しかしながら、日本では少年の種類に依らず、友達への「愛着」が強いほど非行行動が生じやすいといっ

た結果もみられ、従来の理論と矛盾する点が生じている。また齊藤 (2002a) によると、非行少年および高校生の男子を対象とした研究の中で、教師への「愛着」が万引きや自転車盗、器物損壊などの軽微な非行に対して有意な抑制効果を持つという。一方で、非行的な仲間と接触した個人が彼らとの相互作用を通じ、非行行動を促進する効果もあると述べ、従来の理論では説明できない点を挙げている。つまり、仲間との限られた社会において、「コミットメント」や「巻き込み」が非行行動を抑制する要因として機能することは説明できないのである。

さらに無藤ら (2005) は、「社会的絆の理論」を採用して、中学生を対象に最近の非行の発生および抑制要因に関する調査を行っている。無藤ら (2005) は、非行の抑制要因として逸脱する自分を嫌悪するといった規範観念もあると指摘するが、非行の発生要因として仲間からの同調や圧力が普遍的に大きな要因になっていると強調する。米国でも仲間集団へ同調することによる非行行動の発生が問題視されている。その背景には、青年が繰り返しポジティブな仲間の注目や評価を獲得するための功利的な手段として、両親への反抗や仲間同士による薬物使用や暴力に関する話題に同調する行動が学習されていることを指摘している (Mager, *et al.*, 2005)。つまり、「社会的絆の理論」のみでは、非行集団との同調効果の側面を説明することは難しい。

また、非行少年のみに焦点をあてた非行要因の研究において、岡本 (2002) は鑑別所に入所した非行少年の再犯のリスク要因について検証を試みている。この研究では、母親と同居していないことや学校にも行かず、就職もしていない者が再犯リスクを高めると指摘し、4つの社会的絆自体を作り出すための個人的な資質や特徴も見逃せないことを指摘している。

従来の「社会的絆の理論」では、4つの社会的絆が個人と社会との紐帯になり、個人の内的抑制要因として社会的絆の強さが非行を抑制することのみを強調していた。そのため、4つの社会的絆は、個人が他者を含む社会との関係において学習することにより内面化され、個人の特徴と関連して作り出されるとは説明できていない。つまり、個人的な資質や特徴まで言及することはできないと考えられる ⁽²⁾。

また、Hirschi (1969) は、仲間への愛着と非行

の関連を否定している。個人が非行につながるような態度や価値を生み出した時点で、社会的絆が弱まっていることを強調している。つまり、非行的な仲間や同調が非行を生起する時点で社会的絆が弱まっていると指摘するのである。しかしながら、仲間との結びつきに関連するHirschi (1969) の質問は、友人との同一化を尋ねるものであり、「あなたは親友のような人になりたいですか」というものである。この質問は3件法であり、中間カテゴリーが約7割を占めており、本回答をさらに非行仲間か否かで分類しているため、有効な分析ができていないといえよう。さらに、非行につながるような影響を受けやすい少年は、既に社会的絆が弱まっていると指摘する。

このように「社会的絆の理論」に関連する先行研究を概観すると、現代の非行を検討する際には、「社会的絆の理論」の社会的絆自体で非行の要因を説明すると矛盾点が生じる。つまり、「社会的絆の理論」を使用した先行研究においても、従来の社会的絆の概念のみで非行を捉えてはいないといえよう。また、「社会的絆の理論」は、非行の抑制要因の説明に焦点があてられ、発生要因の説明に焦点をあてた研究は少ない。したがって、社会的絆自体を、非行の発生および抑制の主たる要因とすることは説得力に欠けると考えられる。

そこで本稿では、まず「社会的絆の理論」の4つの社会的絆に非行の発生要因として捉える視点を取り入れ、新たな側面から照射し直すことで「社会的絆の理論」の再解釈を試みる。

【「社会的絆の理論」の再考】

1. 「社会的絆の理論」の歴史と新たな視点

「社会的絆の理論」は、社会に共通の価値体系が存在することを前提としており、個人が社会に対して持っている絆の強弱で個人の非行の有無を説明している(小林、1993)。言い換えれば、ある個人が非行を起こすのは、その社会に対する絆が弱まったり、壊れてしまったりしたからとみなすことができる。つまり、個人が共通の社会規範を内面化しており、他者の要求に敏感になっているのである。そして、この他者に対して敏感であることこそが、社会的絆を表しているといえるのである。このように社会的絆を認識することにより、「人はなぜ社会のルールに

従っているのだろうか」(Hirschi, 1969, p23)という説明を「社会的絆の理論」の中心として布置させている。そのため、多くの研究者から「社会的絆の理論」は「性悪説」の立場に立つものであると批判、指摘されてきた(星野、1990;久保、2001;藤本、2003)。Hirschi (1969)自身も、「社会的絆の理論」を犯罪・非行の主たる原因理論へのアプローチとして、緊張理論⁽³⁾の対照に位置づけている。この対峙において、「社会的絆の理論」は非行を押し留める内的規範や社会との紐帯に焦点をあてた理論として強調される。そのため、「社会的絆の理論」はより「性悪説」との批判や指摘を受けてきたといえよう。

しかし、単純に緊張理論の対照として「社会的絆の理論」を「性悪説」の立場に位置づけてよいのであろうか。宝月(2001)は、Hirschiの理論展開は、社会構造が非行を生起させるといった社会解体論やアノミー論などの社会学的な伝統的理論から、個人が社会と結びつく絆を重視し、徐々にその理論に個人の内面的統制のメカニズムの視点を加えていったと指摘する。つまり、Hirschiの「社会的絆の理論」は、社会に存在する逸脱行為の特徴だけではなく、個人の内面的要素にも着目したのである⁽⁴⁾。

松岡(2002)は、個人の内面的統制に焦点をあてるHirschiの観点に従えば、個人は逸脱の機会に遭遇した際に、最終的には自らの利益とリスクの基準(行動の基準)に照らして、非行に走るか否かを選択すると指摘している。そして個人に行動の基準は最初から備わっているものではないため、その基準は習得されねばならないという。この松岡の考えに立つと、「社会的絆の理論」における行動の選択プロセスが始まる時点で学習理論ともいべき視点があると考えられる。Hirschiの理論が学習理論を包括していると仮定すれば、それは分化的接触理論(Sutherland and Cressy, 1960)のような、階層的な文化や社会構造により個人が個別の環境に対して排他的に適応していく学習だけではない。むしろ、個々人の生来持つ個人差や環境との相互作用による学習の視点を考慮していると考えられる。同時に個々人が社会性という一元的で一般的な学習可能な課題⁽⁵⁾に収束していく学習であるといえよう。つまり学習が、行為の反復により随伴してだけでなく、各々の場面の参加者と各々のアーティファクトの組織化によって維持、生成されるものである

と考えるのである(上野、2001)。換言すれば、従来の「社会的絆の理論」は、社会的規範への同調を単一のゴールとして定めていたため、学習理論の視点はあるものの、個人と他者を含む社会との絆の強さが非行を抑制することのみを説明しようとしていたのである。

また久保(2002)は、社会との間に社会的絆が存在しているように見えても、自分と社会との間にそのような絆は存在していないと感じている場合、非行を抑制する要因にはなり得ないと指摘する。しかしながら、この見解を上記の学習理論の視点から捉え直すならば、各人が自分と社会との間には絆が存在していないと感じる時点で、社会の中で自分と社会との間に関係が存在していることを学習しているといえよう。つまり、学習理論では、個人は社会の中で学習された様々な基準をもとに自らの利益とリスク基準を踏まえて行動しようとするのである。

大久保・黒沢(2003)は、社会の中から個人が成り立つという立場で、動機は個人と社会の永続的な相互作用的關係の中に位置し変化するものと指摘する。Bowlby(1969)によれば、個人は愛着対象との継続的な相互作用を通して、内的作業モデルを構築するという。そして、その作業モデルによって新しい状況を知覚しながら未来を予測し、行動を方向づけるという。BowlbyとHirschiの両者は「愛着」を、行動を方向づける概念として捉え、同時に情緒的な結びつきと概念づけている部分で共通である。また、「コミットメント」は集団や組織に所属することに基づく情緒的な愛着と概念化されており、組織の価値や目標を内在化し、自己の役割に積極的に関与する傾向を持つものとされる(安藤、2002)。つまり、大久保・黒沢(2003)に従えば、社会的絆の「愛着」と「コミットメント」もまた個人と社会の關係の中に存在しているものであり、非行行動において抑制にせよ、発生にせよ行動を生起する力となるのである。

以上を踏まえると、「社会的絆の理論」を「性悪説」という視点ではなく、「社会的絆の理論」の社会的絆には、個人が他者を含めた社会との相互作用のもとで学習可能な課題を学習することにより、非行を抑制させるか、あるいは発生させるかといった両価性に注目する新たな視点が必要であると考えられる。さらに、「社会的絆は個人と社会との關係の中で

変容する行動を生起する推進力である」とする視点を「社会的絆の理論」に新たに加えることが重要である。

2. 社会的絆の発達段階における機能変容

既述の通り、「社会的絆の理論」に学習理論的および関係論的な視点を取り入れた新たな視座で考えると、4つの社会的絆は、個人と他者を含む社会との關係の中に存在するものであり、行動を生起する推進力となるといえる。

例えば、林(1989)が挙げた友達への愛着が強いほど非行が生じやすいといった結果や、斉藤(2002b)および無藤ら(2005)が挙げた非行的な仲間との接触による非行の促進は、仲間との限られた社会の中で「愛着」、「コミットメント」や「規範観念」が非行を生起する推進力として作用すると説明できる。実際に、学齢期にある者にとって1日の生活時間の大半を過ごすのは学校であり、その他の社会接触の機会乏しいため、彼らが社会の枠組みを捉える基準は狭いと考えられる。そのため、学齢期にある者は、今そこにある彼らの社会の枠組み、すなわち仲間集団を重要視する傾向にあり、非行を起こす者はその傾向がより強いことが指摘できる。

加藤(2003)は、問題行動の発生・継続化には、問題行動を起こす生徒だけでなく、それが生じる場や他の生徒が持つ雰囲気、すなわち学校、あるいは学級がもつ生徒文化との関連を強調する。また、仲間との關係(Peer relations)や仲間からの圧力(Peer pressure)により、消極的であるが主体的行動としてやむを得ず非行行動を生起するケースもある(Smith *et al.*, 2005)。両者は、個人が遭遇する場面や状況の關係性により、非行が生起する可能性を論じている。

また、安川(1997)は過去10年間に中学校で関わった非行少年の非行要因研究において、非行化した子どもが中学入学後、周囲の生徒を取り込みながら非行を蔓延させると指摘する。さらに、加藤(2005)も、生徒-教師間といった視点から問題行動と生徒の規範意識の影響を検証している。この研究によると、問題行動が蔓延した学校においては、非行化していない一般生徒が教師との關係を悪化させ、一般生徒の規範意識も低下させると指摘している。捉える視点は異なるが、安川(1997)、加藤(2005)の

いずれも非行化した集団との関わりが非行の発生要因となっていることを認めている。つまり、仲間との「愛着」やそれに伴う「コミットメント」、同時に仲間の間にある「規範観念」が非行の発生要因となっていると指摘できる。

このように、個人が仲間集団との関係の中で行動を選択する際に、今まで学習してきた基準をもとに損得を計算しながら行動しようとしていると考えられる。仲間との「愛着」やそれに伴う「コミットメント」、同時に集団での「規範観念」が、非行の発生要因の推進力となっているのである。つまり、仲間集団との社会的絆を基盤として、非行に対する賞賛や地位の確立等の報酬が学習され非行への欲求を生じさせると考える。同時に非行を差し控えた場合の非難や制裁等の罰を回避しようとすると考えられる。従来の「愛着」や「コミットメント」、「規範観念」の考え方に個人の社会性を帯びた功利的志向を付与されている。実際に、2005年の犯罪白書において、「各人が感覚や感情で物事を判断する (p220)」ことや「多少のことは許してもらえると考えている (p220)」などといった少年の功利的な規範意識が問題視されている。このことから社会的絆は、非行行動を生起する推進力となり得ると考えられる。ここでも、4つの社会的絆が個人と社会との間で位置し変化していると説明できる。

Wong (2005) は、「社会的絆の理論」の「巻き込み」を再考し、学校や家庭に関連する慣習的な活動に時間を費やす者は非行抑制に効果はあるものの、友人と時間を過ごすことやデートなどに時間を過ごすといった学齢期の慣習的活動は非行の発生に繋がると結論づけている。つまり、「巻き込み」もまた非行を生起する推進力として存在しうることを示唆している。

Thornberry (1987) は、青年期前期は親子の絆により適応的な行動や社会的価値観を身につけ、青年期中期には家庭外の社会的絆の範囲や重みが増し、友人関係が重要な位置を占め、非行集団との接触が非行的価値観を身につけることになると指摘している。そして青年期後期では就職などといった生活の変化によって、非行的価値観を捨てて通常の社会的価値観を受け入れるようになることを示唆している⁽⁶⁾。また、Moffit (1993) は、大半の非行少年は、一定の年齢に達すると、一般の社会生活に落ち着いてい

くと述べ、青年期の一過性型 (Adolescent limited) をライフコース (Life course) 型の対照として区別している。これらの発達段階における個人の変容過程を用いることにより、社会的絆の変容を説明することができる。すなわち、新しい社会的役割や責任を引き受け、それまでとは異なった人間関係の中で生活することを通じて、社会的絆が個人と社会との関係の中で変化をとげてゆき非行を抑制する推進力として変容し、安定していくといえよう。

以上を踏まえると、4つの社会的絆は従来の非行を抑制させる推進力として機能する一方で、非行を生じさせる推進力として機能するということができる。土井 (2002) は、制度化された社会が抑圧性を失ってきており、青少年は権威ある他者との人間関係の軋轢や威圧的な道徳規範の重荷に苦しむことが少なくなっているとしている。同時に、この社会的事実を個人が理解していないからこそ心理学的視点がクローズアップされてきていると述べている。社会的事実を理解しているか否かの論議は避けるとして、青少年が社会を捉える視点が多様に変容していること、特定の社会の枠組みで行動していることは事実であろう。このことから、発達段階において、4つの社会的絆が非行を生じさせる推進力となると説明できると考えられる。つまり、個人と社会との関係の中で、社会的に適応的な行動と反社会的な行動が状況に応じて変容していく過程を4つの社会的絆から説明することができる。

従来の「社会的絆理論」は絆が弱まることで非行行動を起こすという立場であるため、動機が存在そのものが抜けおちていると指摘し、緊張理論と同様に非行少年の多くが成人後に非行をしなくなるといったことについて説明できないという欠点を持っていた (岡本、1997)。しかしながら、新たに4つの社会的絆に学習理論的および関係論的視点を取り入れ、発達段階の社会的絆の機能変容を説明することにより、適応的な行動の持続要因の解明がいかに重要になるかということが理解できる。

【まとめと今後の課題】

本稿では、先行研究をもとに従来の「社会的絆の理論」では説明しきれない非行について、4つの社会的絆の機能変容を用いて考察することを試みた。これらは従来の社会学的な理論に基づく「社会的絆

の理論」に、個人の内的抑制に焦点を絞りながら個人と社会の関係により社会的絆が変容していく発達の視点から「社会的絆の理論」を再考したものである。

従来の「社会的絆の理論」は、「愛着」、「コミットメント」、「巻き込み」、「規範観念」の4つの社会的絆が非行の抑制要因となり得ることを重視してきた。また、社会が犯罪を統制するという政策的な意味づけから、個人と社会との紐帯により非行が抑制されるとし、個人の内面にも焦点をあてることで新たな理論の意味づけを見出してきた。そして、個人の内面に焦点があてられたことにより、人は生まれながらにして罪を犯すといった「性悪説」の立場に「社会的絆の理論」を布置させるのが一般的であった。

これに対し、本稿では「社会的絆の理論」における4つの社会的絆を、主に学習理論的および関係論的視点から再解釈を行った。それは、社会的絆を学習された様々な基準をもとに自らの利益とリスク基準を踏まえて行動を生起する動機と捉え、同時に社会的絆を個人と社会との関係の中に位置しながら変容していく行動を生起する推進力と捉えようと試みるものである。そして、4つの社会的絆を社会一般の規範価値に即した一義的なものではなく、多義的に捉える視点を新たに加えることを試みたのである。つまり、非行行動の抑制要因としてのみ捉えられてきた4つ社会的絆は、非行行動を促進する要因としても捉え、個人が成長するにつれて、個人が持つ他者との関係や社会の中で変容していくものと考えられるのである。

一方で、齊藤 (2002b) は、家庭の中で疎外的状況におかれ、家庭で満たされない愛情機能を求めて、非行的仲間へ逃避することが多いと指摘する。また、岡邊・小林 (2005) は、近年でも家庭環境および社会的適応状況と非行との関係が弱まっているとはいえ、生育環境上のリスク要因を持つ者が比較的軽微な逸脱から非行の世界に入り、非行性をしだいに深めていくと指摘する。

以上を踏まえると、社会的絆が個人と社会の間で変容していき、発達段階で社会的絆そのものの機能変容が見られる視点を加えたとしても、非行のより詳細かつ狭義の発生および抑制要因を検討する際には、社会的絆それ自体において語られるべきではな

いと考えられる。非行は、行動の次元で表出される問題であるが、この問題の改善に関わろうとするならば、行動の問題を行動の次元でのみ捉えるのは不十分であり、心理的次元と行動との相互関連性に着目する必要があるといえよう。同時に、行動を起こす個人と他者を含めた社会との関係性にも着目する必要もあると考えられる。

本稿では、これまでの非行少年研究が暗黙のうちに従ってきた問いの構造が非行少年のある側面への注目をかえって疎外してはいなかったかといった視点を含んでいる。つまり、4つの社会的絆が非行を発生および抑制させる推進力と考える視点は、個人と社会の関係の中で行動は生じるものであるという視点を与えてくれる。したがって、多分に変動的な社会の現実に対し、既存の理論を適用しようとするのではなく、理論と実践を繰り返しながら様々な視点で理論を再構成することが非行の研究にとって必要であると思われる。また、適応的な行動が持続される要因について、詳細に解明することが非行の抑制を考える上で重要であると考えられる。

最後に、上述した社会的絆の新たな視点は、実証されているわけではない。したがって、個人の社会的絆の形成過程と変容過程を分析する縦断的研究が必要である。また、個人と社会の中で、4つの社会的絆のいずれが有意に働くかを検討する視点も重要であると考えられる。さらに、社会的絆が非行の説明に対して、非行の抑制力として作用するかあるいは促進力として作用するか、などの問題も残されている。本稿に基づく社会的絆の機能変容は、個人と環境の相互作用に基づく社会的文脈に沿って、詳細に検討されることが今後の課題となる。

【註】

- (1) 「Commitment」は本来「Investment」の意味を強調する意図から「投資」と訳されているが、本稿では英語本来の意味において投資的意味合いを「Commitment」は含んでいると考える。その為、純粹に「コミットメント」と訳す。
- (2) Hirschの研究では、社会的絆が作られる仕組みについて個人的な資質や特徴まで言及してはいない。しかしながら、白井ら (2001) は、非行から立ち直った者の自伝を分析し、個人的な資質・特徴を見逃せない要因であることを指摘している。

本論では、社会的絆を学習理論および関係論的な視点から捉えているが、白井ら（2001）の考え方に軸を一とする。

- (3) 緊張理論は、非行行動が生じるメカニズムの究明といった「性善説」に基づく立場に布置させられることが多い。
- (4) 宝月（2001）は、「社会的絆の理論」を行為者に力点を置く理論に位置づけている。行為者に力点を置く理論は、逸脱行為の説明として単に社会構造などのマクロの社会や社会的相互作用に注目するだけではなく、個人の主観的な意図や動機づけ、さらにはセルフコントロールなどの個人の内面や背景に非行要因を見出している。詳細は宝月（2001）を参照されたい。なお、後にHirschiは、セルフコントロールの問題を強調し、セルフコントロールを、長期的な利益を配慮し、即時的な満足を抑える個人の能力と捉えた。このセルフコントロール理論は個人内要因を強調しすぎている為、「社会的絆の理論」のような複合的視点は含まない。詳しくは、Gottfredson & Hirschi（1990）を参照されたい。
- (5) ここでいう課題とは、結果として身につくように繰り返される行為形式をいう。また、学習を「学習者」個人の中から引き出し、社会の諸要素との関係に展開して議論することができると考えた立場に立たせている。詳細は上野（2001）を参照されたい。
- (6) 本邦では、遠山・西田（1987）が鑑別所入所中の非行少年を対象にした調査の中で、非行行動を繰り返すのをやめて、落ち着く必要があると感じる時期としては、平均17.9歳と述べている。

【引用文献】

- 安藤清志 2002 「コミットメント」心理学辞典 有斐閣
- Bowlby, J., 1969 Attachment and loss, Vol.1, Attachment. London: The Hogarth Press. (=1976, 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社)
- 土井隆義 2002 変貌する非行少年像—社会的言説から心理学的言説へ 社会学ジャーナル, 27, 55-68
- 藤本哲也 2003 社会統制理論は我が国の少年非行

を説明する原理となり得るか 法学新報 109 1-37

- Gottfredson, M. R. & Hirschi, T., 1990, A general theory of crime Stanford University Press. (=1996 松本忠久訳 犯罪の基礎理論 文憲堂)
- Hirschi, T., 1969 Cause of Delinquency. University of California Press. (=1995 森田洋司・清永新二監訳 非行の原因—家庭・学校・社会のつながりを求めて 文化書房博文社)
- 星野周弘 1990 少年の内部にある非行抑制要因について 犯罪と非行, 84, 2-26
- 宝月 誠 2001 逸脱行為の生成に関わる諸要因—統合理論を求めて— 京都社会学年報, 9, 1-18
- 法務省法務総合研究所編 2005 平成17年版犯罪白書 財務省印刷局.
- 加藤弘通 2003 問題行動と生徒文化の関係についての研究 犯罪心理学研究, 41(1), 17-26
- 加藤弘通 2005 学校・学級の荒れと教師—生徒関係についての研究 パーソナリティ研究, 13(2), 278-280
- 小林京子 1993 逸脱行動と社会的絆の強さの関係について 犯罪心理学研究, 31(1), 39-48
- 久保崇人 2001 社会的絆理論に基づく非行抑制モデルの検討 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要, 9, 47-56
- 林 世英 1989 少年犯罪・非行に関する原因理論の実証的研究 犯罪心理学研究 27(1), 1-21
- Mager, W., Milichi, R., Harris, J.M., & Howard, A. 2005 Intervention Group for Adolescents With Conduct Problem *Journal of Abnormal Psychology*, 33(3), 349-362
- 松岡 律 2002 社会的絆の理論と展開とインプリケーション 教育実践学研究, 3, 1-13
- Moffit, T. E. 1993 Adolescence-limited and life course persistent antisocial behavior *Psychological Review*, 100, 674-701
- 無藤 隆・藤田宗和・小保方晶子 2005 青少年の非行傾向の要因に関する調査 社会安全, 56, 17-27
- 岡邊 健・小林寿一 2005 近年の粗暴的非行の再検討—「いきなり型」・「普通の子」をどうみるか— 犯罪社会学研究, 30, 102-117

- 岡本英生 2002 非行少年が成人犯罪者となるリスク要因に関する研究 犯罪社会学研究, 27, 102-112
- 岡本英生 1997 非行・犯罪心理学における動機づけ研究—本邦における無力感と効力感に関する研究のこれまでと今後について— 犯罪心理学研究, 35(2), 53-62
- 大久保智生・黒沢 香 2003 関係論的アプローチによる動機づけ概念の再考 心理学評論, 40, 12-23
- 斉藤和範 2002a 非行的な仲間との接触, 社会的ボンドと非行行動—分化的強化仮説と社会的コントロール理論の検証— 教育社会学研究, 71, 131-150
- 斉藤和範 2002b 女子非行の発生要因に関する実証的研究—分化的強化理論と社会的コントロール理論の検証 東京大学教育学研究科紀要, 42, 131-137
- 白井利明・岡本英生・福田研次・栃尾順子・小玉彰二・河野荘子・清水美里・太田貴巳・林幹也・林照子・岡本由美子 2001 非行からの少年の立ち直りに関する生涯発達的研究(II)—ライフヒストリーの分析— 大阪教育大学教育研究所報, 36, 41-57
- Smith, M.G., Dodge, A.K., Dishion, J.T., & McCord, J. 2005 Peer Influence in Children and Adolescents. *Journal of Abnormal Psychology*, 33, 255-265
- Sutherland, E.H. & Cressy, D.R. 1960 Principles of Criminology (=1964 平野龍一・所一彦訳 犯罪の原因 有信堂)
- Thornberry, T.P. 1987 Toward an interactional theory of delinquency. *Criminology*, 25, 863-891
- 遠山宜哉・西田太郎 1987 非行少年の悪の意識とその背景 犯罪心理学研究, 25 (特別号), 18-19
- 上野直樹 2001 状況論的アプローチ 1—状況のインターフェース 金子書房
- Wong, K. S. 2005 The Effect of Adolescent Activities on Delinquency: A Differential Involvement Approach. *Journal of Abnormal Psychology*, 34, 321-333
- 安川禎亮 1997 非行の要因について—中学校教育

現場からの再考察— 犯罪心理学研究, 35(2), 41-51